

【日時】 8月8日 19:00～ 【会場】 中部学院大学 5号館 5001教室

【テーマ】 ～機能解剖シリーズ～「股関節の機能解剖」

【担当者】 佐藤文則先生（所属：岐阜市民病院 理学療法士）

今回は機能解剖学シリーズとして、「股関節の機能解剖」について岐阜市民病院の佐藤文則先生に講義していただいた。

今回の講義では、股関節の大腿骨・寛骨を中心とした骨形態・関節形態、靭帯、筋について確認を行い、最後に大腿骨頭・大腿骨大転子・腸腰筋・大殿筋・小殿筋の触診を行った。

大腿骨は頸体角、前捻角が存在する。正常値は 135° であり、角度が大きくなれば外反股となり、角度が小さくなれば内反股となる。前捻角の正常値は 15° ～ 25° であり、足先が正面を向いているが、前捻角が増大すると足先が相対的に内側を向き股関節外旋可動域は制限されやすい。逆に前捻角が減少すれば足先が相対的に外側を向く。アライメントについては、股関節や膝関節の代償により安定させていることがあるため、レントゲン等で前捻角の確認を行い、問題となる代償動作があれば姿勢修正をしていく必要があると紹介された。股関節は構造的に不安定なため、関節包靭帯が股関節伸展位においてらせん状となり、寛骨臼に対し大腿骨頭をより強固に押さえつけ、安定を図っている。股関節屈曲位では靭帯線維は弛緩し運動性を向上させている。その際は、関節構造的に安定しているために靭帯的な安定性は必要ないとのことだった。

股関節外転筋群は屈曲角度により作用筋が異なってくる。伸展位では屈伸軸より後方に重心線が位置し、大腿筋膜張筋が働く。軽度伸展位では小殿筋、屈伸中間位では屈伸軸のほぼ中心に重心線が位置し中殿筋が働く。屈曲 45° になると大殿筋・梨状筋、 90° になると内閉鎖筋、 110° では大腿方形筋が働く。そのため、トレンデレンブルグ歩行を呈したとしても原因筋は中殿筋とは限らず、歩行周期から詳細なアライメントを確認し原因筋を特定する必要があることを紹介された。

大腰筋とスポーツの関係性について、スプリントパフォーマンスのバイオメカニクスでは股関節周囲筋群の重要性が指摘されていること、短距離選手の大腰筋断面積と走速度とに強い相互関係が見出されていることが挙げられた。大腰筋の断面積が大きかったスポーツは走動作がパフォーマンスに重要であり、断面積が小さかったスポーツは走動作がパフォーマンスにあまり影響されないことが紹介された。また、大腰筋が発達している黒人においては骨盤が前傾位の傾向であるのに対して、大腰筋があまり発達していない日本人では骨盤は中立位であるか後傾位の傾向になっている。走動作においては骨盤前傾位の方がスライド幅を大きくすることができ、筋作用も発揮しやすくなるため、スプリントパフォーマンスは黒人の方が高いとまとめられた。

今回の講義では主に股関節の機能解剖を中心に講義され、そこからスポーツ動作に関連した筋が及ぼす影響について確認するものであった。

文責

後藤三奈(中部学院大学 理学療法学科 3年)

竹野貴俊(中部学院大学 理学療法学科 4年)

佐藤文則(岐阜市民病院)

永田敏貢 (さとう整形外科)